

PROFILE

船橋 利也

聖マリアンナ医科大学大学生理学（細胞・器官生理分野）



このたび4月1日付で聖マリアンナ医科大学大学生理学（細胞・器官生理分野）を担当させて頂くことになりました。私は昭和59年に横浜市立大学を卒業の後、2年間、臨床研修（精神科と一般外科）を行い、生理学の大学院に入学、学位を取得の後、昨年度まで横浜市立大学第二生理学教室に所属しておりました。在職中は恩師の田中富久子名誉教授をはじめ多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

着任して3ヶ月余りが過ぎましたが、明間立雄教授（聖マリアンナ医科大学大学生理学統合生理分野）をはじめ諸先生方のあたたかい御協力で、スムーズに着任する事ができ、何やら長年ここにいるかのように実習や講義を通して忙しく、大変有意義な毎日を送っております。

機会を頂きましたので、まず反省を述べさせて頂きたいと思います。私は現在生理学の分野においてながら、学生時代の生理学講義への参加態度は真面目と言えるものではありませんでした。当時の実習内容もよく覚えておりません。ところが、こちらでは学生はIDカードで自動的に出欠席をとられるシステムになっていますので、事実上、私も学生の講義への参加を義務づける形になりますし、実習では休む間もなく討論し、レポートの課題を与えています。自分の学生時代の不徳を棚に上げてと、大変心苦しいのですが、せめて私のできることとしては、若かりし日の己の未熟を肝に銘じて、将来、学生諸君が医師になったときに、聖マリアンナ医科大学で生理学を学んで良かった、と思われることだと考えております。

生理学の教育は臨床への架け橋として大変重要

である、ということは論じる必要のないことかも知れませんが、そして、講義を受ける学生は素直で、教育を受ける誠意ある態度を持っておりますし、そんな彼らを目前にし、こちら側にも充実感があります。無論、しっかりとした教育をせざるを得ないという責任の重みを感じますが、改めて教育とは何かという事を深く考えさせられる大変すばらしい機会と環境を与えて頂いたと感謝しております。残念ながら、これが生理学の教育だ、と言えるほどのものはまだ見つけておりません。その答えはこれからも出ないかもしれません。まさに学問と同じようにゴールなどないのでしょうか、豊田順一名誉教授が始められ、吉岡利忠客員教授（現弘前学院大学学長）や明間先生が発展させてきた伝統を、よりいっそうにと努力したいと思っております。

最後に、研究に関しまして、少しでも自分の話をさせて頂きます。私は、視床下部が脳の機能にどのようにして影響するのか、どのように行動を調節するのか、興味を持っています。それは、真摯な態度で、一件いかがわしいと思われるような性に関する研究をするギャップに大変魅力を感じてきたからです。大学1年生の時に、生物学の講義で、高杉暹先生（元横浜市立大学学長）が真顔で、どうやってラットに偽妊娠させるか、膣を突っつく棒の工夫の話がされていた時の衝撃と、その時いただいた漠然とした興味が私を生理学の道に引っ張りました。あの日以来、先生にはお目にかかっておりませんが、真摯な態度と棒の話のギャップだけは未だに忘れられません。

略歴

平成 2 年 横浜市立大学医学部助手
平成 3 年 米国ロックフェラー大学留学
平成 7 年 横浜市立大学医学部講師

平成 13 年 横浜市立大学医学部助教授
平成 22 年 4 月 聖マリアンナ医科大学生理学(細胞・器官生理分野) 教授